

2章 母親に対するグループインタビュー

1. 調査概要

1. 1 調査目的

第1章で紹介したインターネット調査の結果からは、

- ・子供がスポーツ活動をしている場合、母親はやりがいを感じている人が多い
- ・子供がスポーツ活動をしていない場合、参加しない理由として母親の負担が上位にあがる

ということが明らかになっている。つまり保護者による支援は、一方で子供のスポーツ環境を活性化し、保護者自身のやりがいにもつながるものの、他方で保護者が子供のスポーツ活動参加をためらう要因になる可能性もある。

本章では当事者である母親に対するグループインタビューでの発言を紹介しながら、以下の問いを明らかにしていきたい。

- ① スポーツ活動をしている場合、母親はどのようにして負担感以上のやりがいを持つようになるのか。また、母親たちがやりがいを見いだせる背景には、どのような環境があったのか。
- ② スポーツ活動をしていない場合、母親はどのような負担感を抱えているのか。また、どのような条件があれば、子供のスポーツ活動参加を検討できるのだろうか。

1. 2 調査方法・対象

インタビューの対象者は、首都圏在住で、第1子が小学生の母親とした。対象者の選定にあたり、調査会社の登録モニターに対してアンケートを実施し、子供のスポーツ活動や保護者の属性、インタビューへの参加の可否等を尋ねた。母親および配偶者がスポーツクラブ・教室を運営している場合や、指導者(ボランティアは除く)である場合は対象から除外し、母親は有職・専業主婦がバランスよく含まれるよう配慮して候補者を選び、電話でインタビュー参加の意思確認を行った。結果的に、10人中9人が条件通り、1人は末子が小学生の母親であった。

インタビューは2グループにわけて実施した。第1グループは、第1子が地域クラブで活動し、母親自身も関与の度合いが高いことを条件とした。関与の度合いは、インターネット調査の質問項目を用いて事前にアンケートを実施し、回答を確認して判断した。第2グループは、インタビュー時点で第1子がスポーツ活動を実施していないことを条件とした。各グループのメンバーは、図表 2-1 にまとめている。

1. 3 調査時期

2017年6月

図表 2-1 インタビュー対象者

第 1 グループ(子供が地域クラブで活動し、母親の関与の度合いも高い)

略称	第1子学年 ・性別	きょうだい	スポーツ以外の 習い事	本人の職業
Aさん	1年生・男子	いない	学習塾	専業主婦
Bさん	2年生・男子	弟(年少)	学習塾 そろばん	パート
Cさん	4年生・女子	妹(年長)	なし	専業主婦
Dさん	6年生・男子	いない	書道	専業主婦
Eさん	6年生・女子	弟(小2)	そろばん 英会話	パート

第 2 グループ(子供がスポーツ活動をしていない)

略称	第1子学年 ・性別	きょうだい	スポーツ以外の 習い事	本人の職業
Vさん	1年生・女子	いない	そろばん	パート
Wさん	3年生・男子	弟(年長)	学習塾	専業主婦
Xさん	4年生・女子	妹(小1)	学習塾 ピアノ	専業主婦
Yさん	5年生・男子	兄(大1) 姉(高1)	学習塾	パート
Zさん	6年生・男子	いない	書道	パート

1. 4 調査内容

第 1 グループ: 現在行っているスポーツ活動と、始めた経緯／検討時点での親の関与イメージ／子供の活動状況と親の関与実態／親のやりがい・負担感 など

第 2 グループ: 現在の習い事の状況／スポーツ活動に対する意向／現在スポーツ活動をしていない理由／子供のスポーツ活動を始める上で必要な条件 など

1. 5 本章を読む上での注意点

インタビュー時の発言は基本的にそのまま記載している。筆者による補足は「()」で、テキストの省略は「…」で表記している。

2. 調査結果

I. スポーツ活動をしているグループのインタビュー

— 母親はどのようにして負担感以上のやりがいを持つようになるのか —

1. 母親の支援実態——多岐にわたる役割

最初に、インタビューの参加者は実際にクラブでどのような役割を担っているのかを整理する。図表 2-2 は、母親たちが語ったこの 1 年間の当番・役員・その他の関わりについてまとめた内容である。

図表 2-2 保護者の役割

	種目	当番	役員	その他
Aさん	ミニバスケット ボール	<ul style="list-style-type: none"> 練習場所の予約 鍵をあける、セキュリティ管理 練習の補助(ボールを出す、終わりの挨拶など) 自分の子供以外の送迎(父親) 怪我の手当 コーチへの謝礼等の準備 	やっていない	親子大会への参加 (母親・父親)
Bさん	サッカー	<ul style="list-style-type: none"> 怪我や体調不良の手当 グラウンドの清掃、施錠と鍵の返却 練習試合のセッティング 試合会場の予約 	やっていない	練習試合の審判(父親)
Cさん	サッカー	<ul style="list-style-type: none"> 子供の荷物のセッティング 怪我や体調不良の手当 夏場の熱中症対策(氷や冷たいタオルの準備) コーチの飲み物の準備 試合会場への荷物の運搬(父親) 急な体調不良に備えた車出し(父親) 	会計 ・役員会への参加 ・集金 ・チームのTシャツの発注	練習の補助(父親)
Dさん	野球	<ul style="list-style-type: none"> 練習時の飲み物の準備 イベント時の調理 	会計 ・集金 ・イベントの参加人数確認 など	特になし
Eさん	野球	<ul style="list-style-type: none"> 大会での審判へのお茶出し 大会時の点数記録 自分の子供以外の送迎(父親) 	合宿係(昨年度) ・合宿時のゲームの用意など 納会係(今年度)	コーチとして指導(父親)

図表 2-2 で、「(父親)」の記載がない項目はすべて、母親の役割である。練習や試合の支援、会計など、多岐にわたる役割を務めていることがわかる。また、お祭りなどのイベントや合宿があるチームでは、それらの運営にも母親が携わっている。

インタビューではこれらの役割について、複数の母親が「仕事だと思って割り切っている」旨の発言をしていた。藤田(1995)は野球少年団でのフィールドワークをもとに、母親たちの役割は「野球そのものに直接関わることはなく、裏方、周辺的な仕事」であると指摘しているが、現在もその様相に変わりはない。子供のスポーツ環境は、そのような母親たちの力で支えられていることがわかる。

2. 参加前のイメージ——抵抗感の強い母親たち

現在は多岐にわたる役割を務める母親たちだが、参加前にはどのように考えていたのだろうか。なかには「親子に友達ができる地域クラブがよかった」「地域のお母さんに関わる(こと)、(母親自身が)バスケット

学べるのは楽しみにしていた」(以上、Aさん)と具体的なメリットを期待していた声も聞かれたが、程度の差こそあれ、どの母親も参加前には不安や抵抗感があった旨を語っている。

「仕方がないと思った。(母親の当番があることに)不安はあったけど、『子供がやりたいなら』というのが強い。」(Aさん)

「すごい抵抗があった。想像をふくらめすぎた。1か月半ぐらい自分が(参加するか否かを)考えた。」(Bさん)

「未知の世界だった。(当番などを)なるべくやらないで済むなら、やらない方向で、と思った。」(Cさん)

「正直、(子供が)野球(をやりたい)と言ったときはリサーチした。『どれだけ自分が関わらずに(済むか)』みたいな感じで。私は全然楽しみではなかった。子供のために仕方がないと思った。」(Dさん)

「(母親も屋外で長時間付き添わなければならないので)冬はつらいなと思った。母親(どうし)もギスギスしているのではないかと、ドキドキしていた。」(Eさん)

特にBさん・Dさんの事前の抵抗感は非常に強かった。母親たちがそれぞれ情報収集や思い悩む期間を経て、ようやく参加に至っていることがわかる。

3. 参加後のやりがい——家族や他の子供たちの変化

参加前には不安や抵抗感が強かった母親たちだが、今は何に「やりがい」を感じているのだろうか。インターネット調査の結果(図表 1-19)をみると、「子供が成長したと感ずることができた」が非常に高く、わが子の成長や活躍が励みになることは想像に難くない。しかしインタビューでは、それ以外の点への言及が多くみられた。以下、3点にまとめて記述する。

3-1. 母親どうしの人間関係

インターネット調査の結果(図表 1-19)から、「保護者どうしで仲良く」なれることは、母親自身のメリットになると考えられる。実際にインタビューでも、保護者どうしの人間関係が良好であることが、母親自身のやりがいにつながっている様子が見えてきた。

「学校の知らないことも(チームの)お母さんたちに聞ける。」(Aさん)

「(事前は)本当に抵抗があって、どうなんだろうと思ったけど、(まわりの母親が)意外にざっくばらんに、なんでもお話して下さる。他の学校の方もいるので、いろんな情報が聞けてよかったと思う。」(Bさん)

「同じ学年の保護者の人がみんなすごい仲(が)いい。なのですごく楽しいのでよかったと思う。」(Cさん)

しかし、同時に複数の母親から、「子供の学年はよかったが、他の学年では母親どうしのトラブルがあった」旨の発言が見受けられた。藤田(1995)は、野球少年団で母親たちが「周辺的な役回りを共同で行い、その中で特に子供に関する情報を交換することで連帯感を形成する」様子を描いているが、そもそも保護者たちが「連帯感を形成」できる関係性であることが、母親の「やりがい」にもつながる重要な条件であることがうかがえる。

3-2. 家族の変化

インタビューでは、子供のきょうだいや父親への影響も語られていた。

「(クラブの親子大会をきっかけに)『スポーツをもう 1 回やってみようかな』というので、子供の影響で私たち(夫婦)も体を動かすようになったし、無駄に土日を過ごさなくなった。」(A さん)

「(幼児の)妹を練習にいつも連れていくので、(コーチやクラブの子供たちから)遊んでもらったりとか、自分の家族みたいにしてもらえるのもよかった。夫はパパさんどうしてフットサルチームを作ってやっている。それが楽しそうにやっているの、よかったと思う。」(C さん)

「(夫も含めた)コーチ陣で、ゴルフに行ったり飲みに行ったりとか、そういう楽しみがある。子供もついていったりとか、家族みんなで楽しめている。」(E さん)

親が子供を支えるという一方的な関与ではなく、家族全体でスポーツやその他の活動を楽しめる状況になると、母親も負担感以上のやりがいを感じるができる。スポーツ活動の中心にいる子供だけではなく、同じ時間・空間を共有する家族の満足度の高さは、保護者による支援体制を考える上で1つの鍵となるようである。

3-3. 他の子供の成長

母親たちからは、自身の子供に限らず、チームの子供たちの成長を見るのが楽しいという声もあがっていた。

「今は見学も楽しい。うちの子だけじゃなく、他の子も『あの子成長したよね』とか見るのが楽しい。」(A さん)

「応援は、やる前は憂鬱だった。『試合ついていくの?』という感じだった。行ってみると…とても楽しい。違う子でも、名指しで『今、今(シュート)!』と言うのが楽しい。」(B さん)

「子供たちの成長が一番わかるのが試合を見ること。…10 対 0 とかぼろ負けしているところから見ているので、成長を感じるの、試合を見に行くのが楽しい。すごい強いか活躍しているとかじゃなくても、成長している過程をずっと見続けられるのが楽しい。」(C さん)

「(大会や試合に)自分の子が出れなくても他の子が頑張ったりするのがかわいくて、嬉しそうな顔をするのもかわいくて、みんなで応援するのがすごく楽しくて、やりがいがある。」(E さん)

以上のように、自身の子供の成長だけでなく、母親や家族の楽しみ、さらにまわりの子の成長も楽しめることが、母親のやりがいにつながっている。

ただ、このような声があがるなかで、D さんは「正直、やりがい、楽しいというのはない」と語り、最後まで積極的な「やりがい」はあがらなかった。D さんは既述のとおり参加前から抵抗感が強く、参加後も「やりがい」を感じることはさほどないようだ。

「楽しいと思うことはない。そこまで(まわりの)お母さんたちとも関わりを持ってないので。野球を見に行っても、チームの人と違うところで見ていることが多い。」

「面倒くさいと言うと、すべてにおいて面倒くさい。なぜやっているかという、仕事としてやっているから。現状やっていて、自分に不利益になることが今現在ない(のでやっている)、というのが一番。去年みたい(に母親どうしの人間関係でトラブルがあった場合)なら、投げ出したくなる。」(以上 D さん)

その他の母親からも、「覚えることが多くて、私は今(気分が)落ちている。」(A さん)、「楽しいときは楽しいけど…心(が)折れそうになるときがある。」(B さん)といった声はあがっていた。2 人ともそれを上回る楽しさを見いだしているものの、熱心にみえる母親たちにも多様なケースが存在し、それぞれに葛藤しながら多くの役割を務めていることがわかる。

4. 母親たちを支える環境

ここでは、そのような母親たちを支える環境に目を向けたい。母親自身も楽しんで活動できる状況には、本人の努力だけでなく、周囲の支えや環境も影響している。翻って考えると、ここで記述するような環境・条件がない場合には、母親たちが強い負担感を抱いてしまう可能性もあるのではないだろうか。

4-1. 父親の役割

第 1 グループの 5 人に共通するのは、父親も固有の役割を担っている点である。具体的な内容は図表 2-2 に記載した通りだが、チームの指導や車の運転など、母親が苦手と感じている部分を担っていることがわかる。図表 2-2 には具体的な記載のない D さんの家庭でも、自身の子供の自主練習への付き添いや、試合時の付き添いは父親が行っているという。

父親が協力できる状況にない家庭は、これらを母親が背負い込むことになる。母親に担う余裕がなければ、子供のスポーツ活動への参加はますます困難になってしまう。

4-2. チームを選べる環境

D さんと E さんは、それぞれ野球を始めるにあたり、複数のチームを検討して選択できる環境にあった。

「近所に野球をやっている子がたくさんいる。強いチーム、弱いチームで真っ二つにわかれている。強いチームのほうは、やっぱり親もすごい関わっていて、…『正直、一緒にやろうよ、とは誘えないな』とやっている人に言われた。」

「うちのチームは『家族も大事にしろ』というチームなので、『(家族で)出かけるなら野球優先でなくていい』というチームなので、無理なくできると思う。」(以上 D さん)

「うちの学校はチームがないけど、…隣の学校に甥っ子がいたので、聞いてみたら土日両方ともで、試合があつて、休むことができないということだった。…『午前だけ(参加するの)はだめなの?』と聞いたら、『雰囲気的にそういうのはないよ』と言われた。もう1つ、自分の実家の近くで、自分が(子供の頃に)行っていた学校にも(チームが)あったので、そこに見学に行ったら、…『午前だけでも午後だけでもかまわない』ということだった。うちは試合させたいというより、体を動かすことが目的だったので、そっちに行くことにした。」(E さん)

D さん・E さんともに、首都圏のなかでも多数のクラブチームが存在する地域に居住する。それぞれ、最

初に検討したチームには保護者の負担や参加時間というハードルがあったものの、別のチームを検討することで、参加に踏み切っている。反対に、こうした親子のニーズにあった選択肢がないことで、スポーツ活動を諦めている家庭が存在する可能性も大いに考えられる。

4-3. 母親たちの支えあい

母親たちは、課された「仕事」をそのまま処理するだけの、受け身の存在ではない。母親どうしの柔軟な対応や工夫によって、負担を軽減している。

「当番は1か月に1回、8時半から16時半まで(グラウンドに)いなきゃいけない。…息子(下の子)が幼稚園だし、(どうしようかと思っていたら)『午前中だけでもいい』と言うから、『おいで』と言うので、『(当番が)午前中だけならな』と思って(クラブに)入れてみた。」

「合宿が去年まであって、去年私は合宿係で、けっこう大変だった。今回総会でみんなで話しあって、合宿が本当に必要なのかという話になって、…『泊まらなくてもいいのではないか』という話になって、今年から(合宿は)なしにしようということになった。」(以上 E さん)

以上、第1グループの母親たちを支える環境について整理した。父親の協力が得られなかったり、家族のニーズにあったクラブの選択ができなかったりすると、母親にかかる負担は大きくなる可能性がある。ただし、クラブにおける当事者どうしの柔軟な対応や工夫によって、負担の大きい役割を軽減することもできる。クラブや保護者間に、保護者の個々の提案や多様性を受け入れる土壌があれば、家庭の状況によるスポーツ活動参加の格差を縮小できる可能性がある。

II. スポーツ活動をしていないグループのインタビュー —母親はどのような負担感を抱えているのか—

1. スポーツ活動に参加しない理由——母親の負担感

続いては、スポーツ活動をしていないグループのインタビューを整理する。母親自身の負担感は、子供のスポーツ活動参加を阻む要因になるのだろうか。インターネット調査の結果を確認すると、スポーツ活動に参加しない理由のなかで保護者の負担に関する項目は比較的上位にあがり(図 1-21)、また子供のスポーツ活動参加を想定した際の保護者の負担感は非常に大きいことがわかる(図 1-24)。

こうした結果からも予想された通り、インタビューは母親の関与・役割に対する抵抗感が強くにじみ出るものとなった。本節では子供の意向・得手不得手とは別に、親自身の意識に焦点をあてて、母親たちの語る「スポーツ活動に参加しない理由」を整理したい。

1-1. 当番や役員に対する抵抗感

母親たちからは、自身の負担感が直接参加できない理由になっているという声が聞かれた。特に、当番や役員に対する抵抗感が強い。母親の役割に対する疑問や人間関係へのわずらわしさが負担の強いイメージとなり、子供の意向や得手不得手とは関係のないところで参加がしづらくなってしまふ。

「ママ友の話を知っていると、(地域クラブは)保護者がみんな来ていて、お茶を出していて、土日つぶれる感じ。…お茶も各自で、自分の子供の分は自分が持っていか、自分の子だけ送迎するとか。練習のときの(親どうしの)わずらわしい付き合いがなく、(親が)不参加ならもっと前向きに検討する。」(Vさん)

「安いところ(クラブ)に行っても、その後の(母親どうしの)お茶とかで、お金がかかったりする。」(Wさん)

「スポーツさせに行っているのに、(スポーツとは)全然違う部分で(なぜ親が関わらなくてはいけないのか)、と
思ってしまう。全くスポーツとは関係ないわずらわしさをわざわざそこに入ってやらなきゃいけないというのは。毎
回集まって役員(を)決めたり、お茶当番とか。…それをやることに必要性を感じない。」(Xさん)

「(地元のクラブは)毎年役員決めがあって、そういうのも面倒くさい。やるやらないも面倒だし、そこで人間関係
で、『あの人はやってない』とかなる。子供がらみでそんなのは、親が疲れてしまう。」(Yさん)

具体的に、そのような「わずらわしさ」がなければ参加を検討できるという声も聞かれた。

「練習のときの(親どうしの)わずらわしい付き合いがなく、(親が)不参加ならもっと前向きに検討する。」(Vさん)

「むしろ『保護者(は)来るな』とはじめからうたってくれるとよい。普段の練習で毎回保護者が来なきゃいけない
とかは、子供のスポーツ云々より、自分の負担を考えてしまって、『やめた』となる。」(Zさん)

なかには、母親たちの間で「費用をとるか、当番をとるか」という考え方があることをうかがわせる発言も
あった。

「わずらわしいのがあると嫌なので、1000円、2000円のプラスアルファで、今わずらわしいと思うものが全部なけ
ればよい。」(Wさん)

「うちのほう(=地元)では(同じ競技でも)2つ(のクラブから)選ぶ感じ。『うちはお金がないから、…学校に入れ
るけど、その代わり覚悟して入る』という人と、『お金は大事だけど、(それでも当番などは)絶対に嫌だ』という
人がいる。」(Xさん)

このように、母親の負担感がスポーツ活動を前向きに検討できない理由となり、また母親の関与やそれ
に伴う「わずらわしさ」の軽減が、スポーツ活動に対するニーズにもなっている。

1-2. 親子のタイミング

母親の関与に対する負担感は、それ自体がスポーツ活動不参加の理由にもなり得るが、インタビュー
からは、それだけではない事情も垣間見えた。

実は第2グループの母親たちは、5人も今でも子供に「できるなら何かスポーツ活動をしてほしい」と思
っている。なかには子供の意欲もあり、具体的にスポーツ活動への参加を検討した家庭もある。だが、親
が支援可能なタイミングと、子供の意欲があがったタイミングがかみ合わずに、参加を諦めている。

「(スイミングに関心があった)保育園のころ、自分の仕事がフルタイムだった。それで送迎ができなかった。今
(自分は)少し余裕ができたけど、(子供)本人が逆に行きたくないと言う。」(Vさん)

「(入ろうと思っていたクラブが、)上層部が変わって、活動場所を毎週ママたちが予約してとることになった。それを聞いて大変だよねと思ってから、それじゃ嫌だなと思った。…すごい気に入っていたけど。…うちの子はそれ(活動風景)を見て『やりたい』となった。とっかかりとしていいと思ったけど、その状態だったので、どうしようと思った。(子供は)やる気になっていていいけど、…(会場を予約)できないときに(当番の母親は)大変らしい。」(Wさん)

「サッカーを一時期調べたりしたけど、女の子はうちのまわりでやっていなかった。それで『どうする?』となっているうちに、フェードアウトした。タイミングがある。子供が行きたいと盛り上がったときに、見つけられなかった。もうちょっと頑張れば、遠くのスポーツクラブに行けば女の子のサッカークラブもあると思うけど、『それを越えてまで』という情熱とかもあるし…」(Xさん)

Wさんは親子のニーズにあったクラブの経営事情の変化、Xさんは競技特有の事情や環境の問題と、事情は多様である。また、Vさんのような問題は共働きやひとり親家庭など、今後も多くの家庭で起こり得ることであろう。

いずれも子供の意欲が高まったタイミングで、保護者も支援が可能な状況を作り出せなかったために、参加をあきらめたケースと捉えられる。

2. 具体的な要望—参加を検討するために

それでは、どのような条件があれば、母親たちは子供のスポーツ活動参加を検討することができるのだろうか。インタビューでは、既にあがっている保護者自身の負担軽減以外にも、具体的な要望を聞くことができた。2点にわけて紹介したい。

2-1. 複数回の体験機会

インタビューでは、親子が決断しやすいよう、複数回の体験参加を可能にしてほしいという声が聞かれた。

「月会費、入会金で組まれて(クラブに)入れてしまって、(子供が)『やっぱり嫌だ』となると、親は全部そろえてやる気満々だけど、子供だけがついてこないとなると困るので、5回ぐらいはお試しで行けたらよい。」(Wさん)

「(体験会を)1回ではわからないから、3回・5回とか、ある程度回数こなしてもらって、それでも本当にやるかどうか(を決めたい)。子供はノリがいいけど、私はその場で決断はできない。」(Zさん)

参加にあたっては、子供が嫌がる場合も、親が悩む場合もある。1-2.で既述したとおり、子供の意欲と親の条件がそろわないと、スポーツ活動を始めるのは難しい。特に親子のいずれがスポーツ活動に積極的ではない場合には、その両方の観点を見極めるために体験の機会が複数回あることが望ましいと思われる。

2-2. 地元クラブに関する情報提供

体験の機会だけでなく、そもそも地域にどのようなクラブがあるのかわからないという声も聞かれた。

「スポーツの情報が少ない。たまに小学校から『バスケやりませんか』というのはあるけど、もっとたくさん情報がほしい。」(Yさん)

「今越してきて2年だけど、自分のママ友がいないから、情報が入っていない。…学校でやっているのもわからない。小さいお教室だと、検索しても出てこない。市でやっているのもわからない。民間も大手はわかるけど、小さいところはわからない。」(Zさん)

地域クラブには充実したHPを持たない団体も多く、Web上で収集できる情報は限られる。そのため、特にZさんのように子供の転校を経験している場合には、母親が有益な情報を得ることが難しくなっている。

以上2点が、第2グループからあげられた具体的な要望であった。現状では、親子に適切な情報や体験の機会が行き届いていないことが、スポーツ活動参加の機会を狭めている可能性が指摘できる。2つの要望はいずれも実現が不可能なものではない。親子だけでなく、クラブにとって、また地域のスポーツ活動の振興にとっても重要なのではないだろうか。

3. 結果のまとめ

母親に対するグループインタビューからは、以下の点が明らかになった。

- ① 現在熱心に関与している母親は、自分の子供の成長だけでなく、母親自身や家族の楽しみ、さらにまわりの子の成長も楽しめることが、やりがいにつながっていた。
- ② やりがいを感じられる母親たちの背景には、父親との役割分担、母親どうしが支えあう関係性などがあった。
- ③ 子供がスポーツ活動をしていない場合、母親は当番や役員に対する抵抗感が特に強く、その「わずらわしさ」を回避するため、参加を前向きに検討できずにいた。
- ④ そのような母親のあいだでは、クラブの情報や複数の体験機会に対するニーズがあった。

第1グループのインタビューの最後に、「自身の関与を負担に感じている母親たちをどう思うか」と投げかけたところ、5人から積極的に参加を勧める発言は出なかった。たとえば、参加前の抵抗感が非常に強かったBさんは、慎重に言葉を選びながら「お母さんがつらいと子供に影響するから、『お母さんが子供のために、と思うぐらいなら絶対やめたほうがいいよ』と言う」と語っている。

インタビューからは、母親も葛藤しながら努力をしている上に、家族やチーム、チームを取り巻く環境に支えられて、子供たちがスポーツに参加できる条件がそろっている様相が見て取れた。西島ほか(2012)は、「機会にアクセスする意欲や条件が個人によって異なる可能性」を指摘しているが、家庭のあり方も多様化するなかで、子供の意欲があるタイミングで親が参加に踏み切れる環境を整えることが、これからの課題となるだろう。

今回のグループインタビューは、首都圏在住の母親を対象にしている。そのため、親子の通える範囲に複数のクラブを検討できる環境があり、スポーツ以外の習い事の選択肢も充実しているケースが多かった。また、インタビューは平日の昼間に実施したため、参加者にはフルタイムで働く女性が含まれなかった。

このような対象者の特徴は本調査の限界でもある。そのため得られる知見は必ずしも一般化できるものではないが、当事者の貴重な声として提示しておきたい。

